

イタリア語における名詞接尾辞 -ATO/-ATA

上野 貴史

1. はじめに

イタリア語における動詞由来の派生名詞には、過去分詞 (*impiegare* 「雇う」 → *impiegato* 「サラリーマン」)・現在分詞 (*cantare* 「歌う」 → *cantante* 「歌手」)・ジェルンディオ (*esaminare* 「試験する」 → *esaminando* 「受験者」) といった動詞の屈折形態と同じものがある。この中で過去分詞と同形態の派生名詞は、他のものと比較して生産的な語形成である。

過去分詞と形態が同じである派生名詞は、男性名詞となる -ATO と女性名詞となる -ATA が表層で現れる。男性名詞となる -ATO には、-are 動詞から派生する -ato (*armare* 「武装させる」 → *armato* 「兵士」)、-ere 動詞から派生する -uto (*ricevere* 「受け取る」 → *ricevuto* 「了解」)、-ire 動詞から派生する -ito (*udire* 「聞く」 → *udito* 「聴覚」)、-ere 動詞の不規則変化動詞から派生する -eso (*offendere* 「感情を害する」 → *offeso* 「侮辱された人」) / -etto (*eleggere* 「選ぶ」 → *eletto* 「選出された人」) / -itto (*sconfiggere* 「打ち破る」 → *sconfitto* 「敗者」) / -otto (*cuocere* 「煮る」 → *cotto* 「煮物」) / -lto (*raccogliere* 「集める」 → *raccolto* 「収穫」)、-ire 動詞の不規則変化動詞から派生する -erto (*aprire* 「開く」 → *aperto* 「屋外」) などがある (これらをまとめて本稿では -ATO と呼ぶ)¹⁾。

女性名詞となる -ATA としては、-are 動詞から派生する -ata (*passaggiare* 「散歩する」 → *passaggiata* 「散歩」)、-ere 動詞から派生する -uta (*cadere* 「落ちる」 → *caduta* 「落下」)、-ire 動詞から派生する -ita (*salire* 「上がる」 → *salita* 「昇り」)、-ere 動詞の不規則変化動詞から派生する -esa (*attendere* 「待つ」 → *attesa* 「待つこと」) / -etta (*eleggere* 「選ぶ」 → *eletta* 「選択」) / -itta (*sconfiggere* 「打ち破る」 → *sconfitta* 「敗北」) / -otta (*rompere* 「壊す」 → *rotta* 「決壊」) / -lta (*scegliere* 「選ぶ」 → *scelta* 「選ぶこと」)、-ire 動詞の不規則変化動詞から派生する -erta (*offrire* 「提供する」 → *offerta* 「申し出」) などがある (これらを本稿では -ATA と呼ぶ)。

このような過去分詞と同形態の接尾辞は再分析され、名詞 (*lettera* 「文学」 → *letterato* 「文学者」) / *occhio* 「目」 → *occhiata* 「ちらっと見ること」) や形容詞 (*bravo* 「優れた」 → *bravata* 「空威張り」) に接辞して動詞派生と同じような派生名詞を形成することがある。

このような過去分詞の屈折語尾と同形態の -ATO/ -ATA が付加して生成される派生名

詞には、同じ動詞語基から派生して意味の対立がみられるものもあり、接尾辞自体が持つ意味機能を明確にすることがこのような派生語を理解する上で重要なことであると考えられる。そこで本稿では、この表層に現れる -ATO/ -ATA の生成過程と意味構造を分析することにより、これらの接尾辞の実態を明らかにしていくことにする。

2. 接尾辞 -ATO

接尾辞 -ATO が付加する語基は、動詞と名詞である。動詞を語基とする派生名詞には、アクセントが接尾辞ではなく語末から三番目に位置するものがある (lascito 「遺産」/ preterito 「過去」)。これらに付加する接尾辞はすべて -ito であり、接尾辞 -ATO とは異なる²⁾。

名詞を語基とするものは、-ato が基本的に付加するが、-ito や -uto が付加しているものも若干みられる。-uto は、生物の身体に関する名詞に付加し、派生形容詞を生成する接尾辞である (occhialuto 「眼鏡をかけた」/ pennuto 「羽のある」)。-ito が付加しているものは、assito 「仕切り」/ clorito 「亜塩素酸塩」など僅かしかない。

2.1. 動詞派生

動詞派生の接尾辞 -ATO を独立した接尾辞として記述しているものに『-ato、-ito : 「…すること [もの・場所]』』(小林(2001:37))がある。また、Dardano & Trifone(1997:527)では、-ATO と -ATA を同一に扱い "trasformazione mediante la forma del participio passato maschile o femminile" 「男性形と女性形の過去分詞を通じた変形」と指摘している。動詞派生の接尾辞 -ATO による派生名詞は、その多くが同時に派生形容詞を持つことから、Dardano & Trifone(1997)の指摘のように、過去分詞と深く関係しているのは事実である。しかし、aperto 「屋外」 - aperta 「開くこと」/ caduto 「戦死者」 - caduta 「落下」などのように -ATA との意味の対立がみられることから、単にこれらが過去分詞の男性形と女性形と述べるだけでは説明が不十分であるように思われる。

このような動詞派生の接尾辞 -ATO が付加した派生名詞は、その語基に注目すると、(1)や(2)のようなものがある。

- (1) a. armato 「兵士」/ bandito 「悪党」/ esaltato 「熱狂者」/ ritirato 「厭世人」
b. agglomerato 「ブロック」/ battuto 「ミンチ」/ portato 「結果」/ scritto 「文書」
- (2) a. arrivato 「到着した人」/ caduto 「戦死者」/ divorziato 「離婚した人」/ morto 「死人」
b. muggito 「牛の鳴き声」/ pianto 「涙」/ ruggito 「うなり声」/ vagito 「新生児の泣き声」

(1)は語基が他動詞 (<+Tr>)、(2)は自動詞 (<-Tr>) から派生しているものである。また、(1a)と(2a)は派生した名詞が <+Human> (人間名詞)、(1b)と(2b)は <-Human> (非人間名詞) の意味素性を持つものである。

(1)で示した語基が他動詞である派生名詞の多くは、同時に派生形容詞を持つ。

(3) a. [armato]_A 「武装した」 / [bandito]_A 「追放された」 / [ritirato]_A 「引退した」

b. [battuto]_A 「たたかれた」 / [portato]_A 「運ばれた」 / [scritto]_A 「書かれた」

このように、他動詞の語基に過去分詞の屈折語尾と同一である接尾辞 -ATO' が付加することによって³⁾、動詞から形容詞に語彙範疇が変化し、<-Active> (受動) という意味素性が付加される。例えば [bandito]_A は、他動詞 bandire 「追放する」の語基に -ATO' が付加することにより、<-Active>の意味素性が加わり bandito 「追放された」という派生形容詞を生成している。このような生成過程を一般化して記述すると(4)のようになる⁴⁾。

(4) [V]_v → [[V]_v + ATO']_A
 <+Tr> <+Tr> <-Active>

(1)で示した派生名詞は、(4)の生成過程に名詞という語彙範疇に変えるためのゼロ接尾辞 (φ) がさらに付加されてできたものと考えられる。

(5) [V]_v → [[V]_v + ATO']_A → [[[V]_v + ATO']_A + φ]_N
 <+Tr> <+Tr> <-Active> <+Tr> <-Active>

(5)から生成された派生名詞は、(1a)が「ひと」、(1b)が「もの」という意味を持つ。これを一般化して記述すると(6)のようになる。

(6) 'persona/ cosa che è V-ATO' 「Vされるひと・もの」

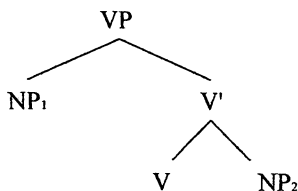
「ひと」か「もの」かの意味選択は、語基である他動詞が目的語の項として持つ選択制限の有生・無生に依存していると考えられる。例えば、bandire には①「広告する」②「追放する」という二つの意味があるが、この②の意味における目的語の選択制限は <+Human> である。

(7) bandire [+_____ NP]_{vp}
 <+Human>

この VP 内にある NP の <+Human> という選択制限は、接尾辞 -ATO' が付加した派生名詞にも素性として受け継がれていると考えられる⁵⁾。

次に、語基に自動詞を持つ(2)の派生名詞についてであるが、これらの動詞語基は、(2a)が非対格自動詞、(2b)が非能格自動詞となっている。非対格自動詞は、受動的に事象に係わる Theme (対象) を主語にとる自動詞であり、この Theme となる要素が D 構造で直接目的語の位置に生成されるものである。つまり、非対格自動詞は、D 構造では他動詞と同様、内項に NP を持つことになる。他動詞と非対格自動詞の D 構造を示したものが(8)である。

(8) 他動詞と非対格自動詞の D 構造



他動詞と非対格自動詞は、D 構造で Theme という内項 (NP_i) を持つことは共通しているが、主語の位置である NP_i に関して、他動詞が Agent という外項としての主語を持つのに対し、非対格自動詞は Agent を持たないため空となるという点で異なっている。このように、非対格自動詞を持つ語基は、他動詞と同様、内項に項を持つため (9) のような派生形容詞を生成する。

(9) [arrivato]_A 「到着した」 / [caduto]_A 「倒れた」 / [morto]_A 「死んだ」

このような非対格自動詞 (<+Erg>) は D 構造で受動的意味を有しているため、接尾辞 -ATO' が付加された派生形容詞は <+Active> (能動) の意味素性を有することになる。

(10) [V]_v → [[V]_v + ATO']_A
 <+Erg> <+Erg> <+Active>

この派生形容詞に、語彙範疇を名詞に変えるゼロ接尾辞が付加された結果、語基が持つ内項の Theme の <+Human> という素性が付加して (2a) のような派生名詞が生成されると考えられる。

(11) [V]_v → [[V]_v + ATO']_A → [[[V]_v + ATO']_A + φ]_N
 <+Erg> <+Erg> <+Active> <+Erg> <+Active> <+Human>

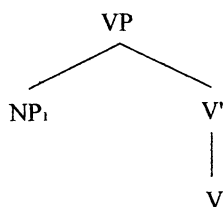
このようにして生成された派生名詞の意味構造を一般化して記述すると、(12) のようになる⁹⁾。

(12) 'persona che V' 「V するひと」

例えば arrivato は、[arrivare]_v という非対格自動詞の語基に接尾辞 -ATO' が付加し [arrivato]_A を生成し、さらに語彙範疇を変えるゼロ接尾辞が付加して [arrivato]_N が生成される。そして、こうして生成された arrivato は、'persona che arriva' 「到着する人」という意味となる。このように、他動詞と非対格自動詞を語基に持つ派生名詞は、派生形容詞を作る接尾辞 -ATO' にゼロ接尾辞を付加するといった同じ過程を経て生成される。

一方、語基に非能格自動詞を持つ (2b) は、意図的に動作を行う動作主である Agent を主語にとる自動詞であり、動詞自身に内項を持たないものである。この非能格自動詞の D 構造を示すと (13) のようになる。

(13) 非能格自動詞の D 構造



(13) で示したように、非能格自動詞は内項に NP を持たないため -ATO' が付加された派生形容詞を持たない。このように、非能格自動詞 (<-Erg>) を語基とする派生名詞は、接尾辞 -ATO が直接語基に付加されているため、「受動」の意味がみられない。

しかし、非能格自動詞を語基とする派生語は、動物の「泣き・笑い」といった意味に限定されており、いずれもラテン語において動詞から派生したものである (ridēre < rīsum < riso 「笑い」 / rugīre < rugitum < ruggito 「うなり声」)。このようなことから、非能格自動詞を語基に持つ派生名詞は、語形成規則によって生成される統語的派生語ではなく、初めから辞書 (Lexicon) に登録されている語彙的派生語と考えられる⁷⁾。

このことから、動詞派生の接尾辞 -ATO は、非能格自動詞が語基となる語彙的派生語と、他動詞・非対格自動詞が語基となって接尾辞 -ATO¹ を付加して派生形容詞となり、ゼロ接尾辞が付加して派生名詞となる統語的派生語を区別して扱う必要がある。

2.2. 名詞派生

名詞派生の接尾辞 -ATO については、"dignità, carica, ufficio, stato" 「尊厳、職務、官職、状態」 (Dardano & Trifone (1997:535))、『「職業人の活動の場」・「役職、地位；権威、権能；活動の結果」』 (小林 (2001:25-27))、"le funzioni, il periodo, l'insieme delle persone rispettive, il territorio e persino la sede, l'edificio" 「職務、期間、関係する人の総体、領域、所在地、建物」 (Tekavčić (1980:31-32))⁸⁾ など、幅広い意味が派生するという記述がみられる。

このような名詞派生の接尾辞 -ATO が付加した派生名詞には、(14) のようなものがある。

(14) a. aranciato 「オレンジ色」 / disgraziato 「不運な人」 / incidentato 「事故にあった人」

b. dottorato 「学士号」 / ispettorato 「検査職」 / volontariato 「志願兵役 (の期間)」

(14a) は語基である名詞が <-Human>、(14b) は <+Human> の意味素性を持つものである。

(15) a. arancia 「オレンジ」 / disgrazia 「不運」 / incidente 「事故」

b. dottore 「学士」 / ispettore 「検査官」 / volontario 「志願兵」

語基である名詞の意味素性が <-Human> のものは、(14a) のような派生名詞と同時に、(16) のような派生形容詞を持つ。

(16) [aranciato]_A 「オレンジ色の」 / [disgraziato]_A 「不運な」 / [incidentato]_A 「事故にあった」

このような語基が <-Human> の派生語には、dentato 「歯のある」のように派生名詞を持たず派生形容詞だけを持つものがある。このことから <-Human> の語基は、形容詞接尾辞 -ATO² が付加して派生形容詞を生成していることが分かる。このため、(14a) の派生名詞は、形容詞接尾辞 -ATO² が付加して(16) のような派生形容詞となり、さらにゼロ接尾辞が付加して生成していると考えられる。例えば disgraziato は、語基である [disgraziare]_V に派生形容詞を作る接尾辞 -ATO² が付加することにより [disgraziato]_A となり、さらに語彙範疇を名詞に変えるゼロ接尾辞が付加して [[disgraziato]_A]_N が生成される。この生成過程を一般化して記述すると(17) のようになり⁹⁾、その意味構造は(18) のようになる。

(17) [N]_N → [[N]_N + ATO²]_A → [[[N]_N + ATO²]_A + φ]_N
 <-Human> <-Human> <-Human>

(18) 'persona/ cosa connessa con N' 「N に関するひと・もの」

この接尾辞 -ATO³ は、形容詞を派生する接尾辞であるという点で -ATO¹ と類似している。しかし、Scalise(1994)が「単一語基の修正仮説」(Ipotesi Modificata della Base Unica)として述べているように、接尾辞は [+N]や [+V]というように定義できる同じ統語クラスの語基にだけ付加するということから、名詞語基に付加する接尾辞と動詞語基に付加する接尾辞を同一の接尾辞として扱うことはできない。

一方、語基が <+Human>の意味素性を持つ(14b)は、同形の派生形容詞を持たないことから、語基に直接接尾辞 -ATO³ を付加していると思われる。この結果、生成された派生名詞は、<-Human>という意味素性を持つことになる。これを一般化して記述すると(19)のようになる。

$$(19) [N]_N \quad \rightarrow \quad [[N]_N + ATO^3]_N$$

<+Human> <+Human> <-Human>

この生成された派生名詞の意味は、先行研究に述べられているように多岐にわたるが、(20)のような '(periodo del) posto di N' を基本的な意味構造として設定できると思われる。

(20) '(periodo del) posto di N' 「N の地位・場所 (の期間)」

例えば *dottorato* は「学士(*dottore*)の地位(posto)」で「学士号」、*commissariato* は「代表委員(*commissario*)のいる場所(posto)」で「代表委員の管轄区・事務所」、*volontariato* は「志願兵(*volontario*)の地位(posto)の期間(periodo)」で「志願兵役の期間」となる¹⁰⁾。

3. 接尾辞 -ATA

接尾辞 -ATA が付加する語基は、動詞・名詞・形容詞である。語基が形容詞であるものは、*bravata*「空威張り」/ *cretinata*「馬鹿な言動」/ *stupidata*「愚行」などのように、「行為の優劣」を意味する形容詞語基から派生しているものに限られていて、数も僅かである。

動詞を語基とする派生名詞には、接尾辞 -ito と同様、アクセントが語末から三番目に位置するものがある (*accomandita*「合資会社」/ *rendita*「収入」)。これらは、接尾辞 -ATA とは異なる接尾辞 -ita が付加している語彙的派生語である¹¹⁾。また、語末にアクセントが現れる -ità も形容詞語基に付加して抽象名詞を生成するもので、接尾辞 -ATA とは異なる別の接尾辞である (*abilità*「能力」/ *brevità*「短さ」)¹²⁾。

名詞を語基とする接尾辞は -ata であり、-uta/ -ita は付加されない¹³⁾。

3.1. 動詞派生

『-ata, -uta, -ita : 「…する 1 回の行為」』(小林(1996:37)) や "accomplishment of the action expressed by the verb"「動詞によって表現される行為の達成」(Maiden(1995:189))などと説明される動詞派生の接尾辞 -ATA には、(21)のようなものがある。

- (21) a. *attesa*「待つこと」/ *bagnata*「水を浴びること」/ *traversata*「渡ること」
 b. *cascata*「落下」/ *scappata*「逃げること」/ *uscita*「外出」
 c. *abbaiaata*「吠えること」/ *dormita*「熟睡」/ *telefonata*「電話をかけること」/

(21a)は他動詞、(21b)は非対格自動詞、(21c)は非能格自動詞が語基となっている。この接尾辞 -ATA に関して、Scalise(1994:213-215)は、過去分詞の形態に接尾辞 -A が付加されて生成するとしている。

(22) *camminato + a/ dormito + a/ bevuto + a* (Scalise(1994:215))

しかし、(21)で示した例から分かるように、接尾辞 -ATA は語基の統語機能に関係なく 'atto di V' 「Vする行為」を意味し、その派生名詞は「受動」の意味を有しない。このため、Scalise(1994)が指摘している生成過程では、(21a)のような特に語基が他動詞のものに関して、「能動」の語基が接尾辞 -ATO を付加して「受動」の意味を持ち、さらに接尾辞 -A を付加することによってまた「能動」の意味を持つことになる。このような「能動」→「受動」→「能動」という派生プロセスは、語形成としては考えにくいと思われる。このことから、(21)のような派生名詞は、Scalise(1994)が指摘しているような過去分詞に接尾辞 -A が付加して生成されるのではなく、接尾辞 -ATA¹ が動詞語基に直接付加して生成されると考えられる。この生成過程を一般化して記述したものが(23)である。

(23) $[V]_v \rightarrow [[V]_v + ATA^1]_N$

例えば *telefonata* は、 $[telefonare]_v$ という動詞語基に接尾辞 -ATA¹ が付加して $[telefonata]_N$ を生成している。このような生成過程は、語基が他動詞・非対格自動詞・非能格自動詞のすべてに共通して適用される。この点に関しては、接尾辞 -ATO¹ が語基である動詞の統語機能に深く関係していることと対照的である。

この接尾辞 -ATA¹ の意味としては、'atto di V' が基本的であるが、時に「力強く」や「瞬時に」といった意味が加わることがある。また、'atto di V' の「量」を表す場合もみられる。これを含めて接尾辞 -ATA¹ の意味構造を一般化すると(24)のようになる。

(24) '(quantità dell') atto di V (fortemente o momentaneamente)'

「(力強く・瞬時に) Vする行為 (の量)」

例えば *bagnata* は「濡らす(*bagnare*)行為(atto)」で「水を浴びること」、*dormita* は「力強く(*fortemente*)眠る(*dormire*)行為(atto)」で「熟睡」、*passata* は「瞬時に(*momentaneamente*)通る(*passare*)行為(atto)」で「さっと通り過ぎること」、*falciata* は「鎌で刈る(*falciare*)行為(atto)の量(quantità)」で「一刈りの量」となる。

3.2. 名詞派生

名詞派生 -ATA について小林(2001:26,28)では、『「を用いた一打[撃]」・「(の・による)行為・振舞」・「(の経過・期間)・「(に)入る[載る]分量」・「(の)連続・集合』』という四種類のものに分けている。また、Dardano & Trifone(1997:535-536)では、「il contenuto/ insieme/ colpo inferto」 「含有物・総体・被った打撃」・"atto proprio" 「固有の行為」の二種類に分けている。

このような広範囲の意味を持つ接尾辞 -ATA² が付加した派生名詞は、(25a)のような「打

撃」・「振舞」といった「行為」と、(25b)のような「含有物」・「分量」・「総体」といった「集合」に大別することができると思われる。

(25) a. *forbiciata* 「切断」 / *ragazzata* 「子どもっぽい行為」 / *ventata* 「突風」

b. *boccata* 「一口分」 / *invernata* 「冬期」 / *tavolata* 「会食者」

「行為」に関しては、'atto da N' 「Nによる行為」が基本的な意味であるが、「力強い」や「瞬時の」という意味が付加されることがある。また、「集合」については、この「行為」の「量」や「総体」を意味している。このことから、このような接尾辞 -ATA² の意味構造は、(26)のようにまとめて記述することができると思われる。

(26) '(insieme o quantità dell')atto (forte o momentaneo) da/ in N'

「Nによる・ある（力強い・瞬時の）行為（の総体・量）」

例えば、「子ども (*bambino*)による行為 (*atto*)」で *bambinata* 「子どもじみたこと」、「風 (*vento*)による瞬時の行為 (*atto momentaneo*)」で *ventata* 「突風」、「フォーク (*forchetta*)による・ある行為 (*atto*) (の量 (*quantità*))」で *forchettata* 「フォーク一刺し (の分量)」、「笑い (*riso*)による力強い行為 (*atto forte*)」で *risata* 「爆笑」、「テーブル (*tavola*)にある行為 (*atto*)の総体 (*insieme*)」で *tavolata* 「会食者」、「夜 (*notte*)にある行為 (*atto*)の総体 (*insieme*)」で *nottata* 「夜間」となる。このような(26)の意味構造は、動詞語基に付加する接尾辞 -ATA¹ の意味構造と類似している。また、生成過程も、-ATA¹と同様、語基に -ATA²が直接付加される。

(27) $[N]_N \rightarrow [[N]_N + ATA^2]_N$

4. まとめ

本稿では、表層上に複雑に出現する接尾辞 -ATO/ -ATA に関して、その生成過程と派生する語の意味構造の分析を行った。これをまとめたものが<表 1>である。

<表 1 : 接尾辞 -ATO/ -ATA >

接尾辞	語基	生成過程	意味
-ATO	他動詞	$[[[V]_v + ATO^1]_A + \phi]_N$	'persona/ cosa che è V-ATO'
	非対格自動詞		'persona che V'
	非能格自動詞	$[N]_N$	'atto di V'
	非人間名詞	$[[[N]_N + ATO^2]_A + \phi]_N$	'persona/ cosa connessa con N'
	人間名詞	$[[N]_N + ATO^3]_N$	'(periodo del) posto di N'
-ATA	動詞	$[[V]_v + ATA^1]_N$	'(quantità dell')atto di V (fortemente o momentaneamente)'
	名詞	$[[N]_N + ATA^2]_N$	'(insieme o quantità dell')atto (forte o momentaneo) da/ in N'

接尾辞としては、-ATO には形容詞接尾辞 -ATO¹ (他動詞・非対格自動詞語基) と -ATO² (非人間名詞語基)、名詞接尾辞 -ATO³ (人間名詞語基) の三種類、-ATA には名詞接尾辞 -ATA¹ (動詞語基) と -ATA² (名詞語基) の二種類を区別する必要があることを指摘した。このことから、名詞接尾辞としては、人間名詞の語基に接辞する -ATO³ と、動詞と

名詞語基にそれぞれ接辞する-ATA¹と-ATA²があることになる。

最後に、-ATO/ -ATAによって生成する派生名詞の分布を考察しておく。

語基が他動詞の場合、-ATOが<-Active>(battuto「ミンチ」/ offeso「侮辱された人」)、-ATAが<+Active>(battuta「たたくこと」/ offesa「侮辱」)となり、語基が非対格自動詞の場合、-ATOが<+Human>(venuto「到着した人」/ caduto「戦死者」)、-ATAが<-Human>(venuta「来ること」/ caduta「落下」)という対立を示す。語基が非能格自動詞の場合は、-ATOも -ATAも 'atto di V' という同じような意味になる。ラテン語において語形成される語彙的派生語である -ATO (ululato「吠えること」)は、abbaiata「遠吠え」のようにイタリア語で語形成される場合、-ATA¹が付加されると考えられる。

語基が非人間名詞の場合は、-ATOが 'persona/ cosa connessa con N' (costato「肋骨」/ graticciato「棚」)、-ATAが '(insieme o quantità dell')atto (forte o momentaneo) da/ in N' (costata「リブローズ」/ graticciata「格子垣」)となり、語基が人間名詞の場合は、-ATOが '(periodo del) posto di N' (celibato「独身(の状態)」/ patriziato「貴族階級」)、-ATAが '(insieme o quantità dell')atto (forte o momentaneo) da/ in N' (canagliata「悪漢行為」/ ragazzata「子どもっぽい行為」)という意味となる。これをまとめたものが<表2>である。

<表2：-ATO/ -ATAの意味分布>

語基	-ATO	-ATA
他動詞	<-Active> 'persona/ cosa che è V-ATO'	<+Active> 'atto di V'
非対格自動詞	<+Human> 'persona che V'	<-Human> 'atto di V'
非能格自動詞	'atto di V'	
非人間名詞	'persona/ cosa connessa con N'	'(insieme o quantità dell')atto (forte o
人間名詞	'(periodo del) posto di N'	momentaneo) da/ in N'

注

- 1) 接尾辞 -ATO が付加して人間名詞 (<+Human>) となるものには、女性形を持つものがある (eletto/ eletta)。このような接尾辞 -ATO が付加した人間名詞の女性形態は本稿では -ATO として扱う。
- 2) 接尾辞 -ito の語形成は生産性が低い。
- 3) 過去分詞の生成が屈折規則によるものか派生規則によるものかについて、Scalise(1994:273-274)では、問題点があるとしながらも屈折規則として処理しているが、本稿では派生規則が接尾辞 -ATO を付加させるものとしている。この点に関しては、別の機会に論じる予定である。
- 4) 接尾辞 -ATORE は、動詞の持つ <+Active> という意味素性をそのまま受け継ぐため、-ATO¹ と反対の意味となる。accusare「非難する」→ accusato「被告人」/ accusatore「告発者」。affamare「餓えさせる」→ affamato「飢えた人」/ affamatore「飢えさせる人」。
- 5) abitare「住む」は目的語の選択制限が <-Human> で「場所」の意味をとるため、abitato「住居」のように「場所」の意味を持つ。

- 6) 非対格自動詞を語基に持つ派生名詞は、すべて <+Human>の素性を持つ。これは、非対格自動詞が内項に持つ NP が <+Human>であるためと考えられる。
- 7) 非能格自動詞が語基となる派生語は、アクセントが語末から三番目に位置する -ito の派生語と、ラテン語の動詞から派生していることや語彙的派生語であるといった点で類似しているところが多い。
- 8) Tekavčić(1980)は、さらに -ATO がラテン語の接尾辞 -ātus を語源とし、北部方言では -ado という形態も使用されることを指摘している (contado 「都市周辺部」 / vescovado 「司教の権威」)。
- 9) 派生形容詞を持たない scienziato 「科学者」は、この生成過程は適用されない。scienza と -ato の間に -i- という音が添加されていることから、scienziato は語基である scienza 「科学」に -ATO² が付加して生成しているのではなく、初めから辞書に登録されている語彙的派生語であると考えられる。
- 10) この他に、artigianato 「手工芸 (品)」のように 'qualcosa che N fa' < N がすること・もの > という意味の拡張がみられる。また、elettorato 「選挙民」 / padronato 「使用者」などは、総称的に用いられるものであって、<+Human>の素性を持つものではない。
- 11) 接尾辞 -ita の生産性は低い。
- 12) この他、「言語・住民」を意味する形容詞接尾辞 -ita も考察の対象から除外する (semita 「セム族 (の)」)。
- 13) 例外として、barba に -uta が付加する barbata があるが、語基である barba 「ひげ」と派生語である barbata 「(特殊な) かぶと」には意味の隔たりが大きいことから、barbata は語彙的派生語と考えられる。

参考文献

- Dardano, Maurizio & Pietro Trifone. 1997. *La nuova grammatica della lingua italiana*. Zanichelli.
- Maiden, Martin. 1995. *A Linguistic History of Italian*. Longman.
- Rohlf, Gerhard. 1969. *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti: Sintassi e formazione delle parole*. Piccola Biblioteca Einaudi.
- Scalise, Sergio. 1994. *Le strutture del linguaggio: Morfologia*. il Mulino.
- Sensini, Marcello. 1997. *La grammatica della lingua italiana*. Oscar Mondadori.
- Serianni, Luca. 1986. *Grammatica italiana: Italiano comune e lingua letteraria*. UTET.
- Tekavčić, Pavao. 1980. *Grammatica storica dell'italiano: III. Lessico*. Società editrice il Mulino.
- 小林惺. 2001. 『イタリア文解読法』. 大学書林.
- 上野貴史. 1996. 「イタリア語における《N+N》複合語の生成: Head と語形成レベル」. 『言語文化学会論集』(言語文化学会編) 第7号. pp.21-42.
- . 1998a. 「<Capo+X>複合名詞にみる複数形態の生成構造と構成要素の機能関係」. 『言語文化学会論集』(言語文化学会編) 第10号. pp.91-110.
- . 1998b. 「語彙部門におけるイタリア語複合語: <名詞+形容詞/形容詞+名詞>複合語から」. 『ロマンス語研究』(日本ロマンス語学会編) 第31号. pp.21-30.
- . 1998c. 「複合語における複数形態と生成構造」. 『イタリア学会誌』 第48号. pp.181-202.
- . 2000. 「「古典語的合成語」の語形成過程について」. 『イタリア学会誌』 第50号. pp.49-75.